

近世史サークル資料 58

板碑が語る東大和の中世

(2017. 10. 25.)

東大和市を中心に、中世活躍した人物を追ってきました。今回は、大石氏、太田道灌等の人物に入る前に、板碑に刻まれた人々から東大和の中世を見てみましょう。

I 板碑

板碑は秩父産の青い岩石（緑泥変岩）を材料にして、石板状にしたものです。「青石塔婆」とも呼ばれます。産地が近かったことと鎌倉街道が通じていたことから、武蔵には多数（約 4 万基）が建立され、東大和市域にも 100 を超すものが発見されています。



板碑の造立目的

板碑の表には大日如来や阿弥陀様の文字などとともに年号や人の名前が彫られています。そこから、青石塔婆と云われるように、石造の塔婆とされます。

故人の追善供養や自らの現世・来世の安楽を願う逆修、村人達の連帯意識に基づく結衆の思いを集結するために造立されたと考えられています。

種子

多くの板碑には仏尊を示した梵字が彫り込まれています。これを種子と呼んでいますが、地域的な特徴があります。

東大和市の場合	東京都区部
阿弥陀一尊 44 %	66 %
阿弥陀三尊 31 %	24 %
その他 25 %	10 %

◎東村山市の場合は阿弥陀一尊、阿弥陀三尊、弥陀種子で 90%を占め、薬師如来がないことと名号が比較的多いことが特徴としてあげられています。



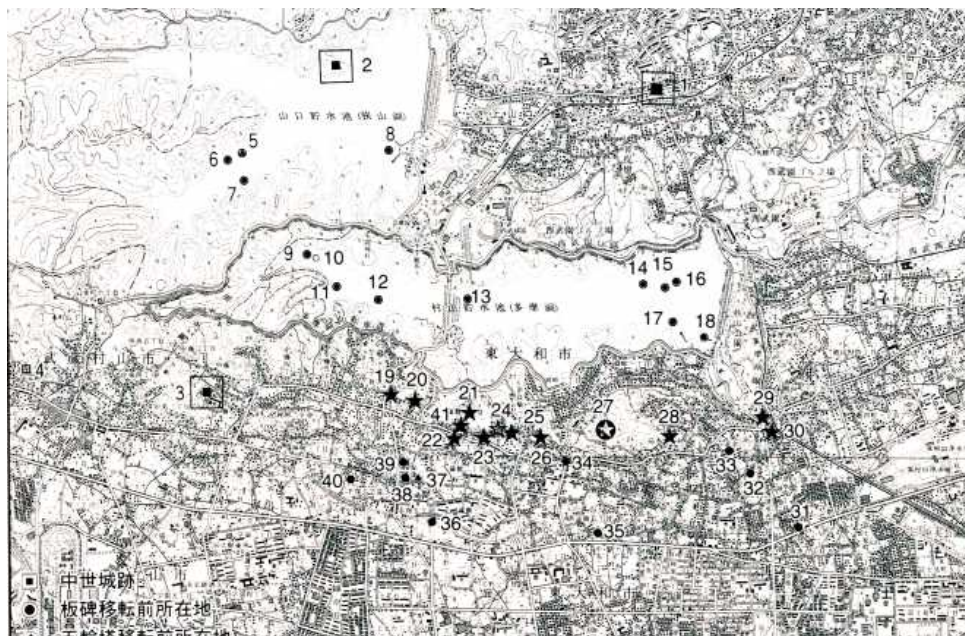
年号

板碑には年号が記されている場合が多く周辺市の状況は次の通りです。

市名	最古	最新
東大和市	永仁 2 年(1294)	天文 11 年(1542)
武蔵村山市	正応 3 年(1290)	
東村山市	弘安 6 年(1283)	天文 16 年(1547)

造立場所

板碑は約 250 年間を通して建立されました。そのため、建立の場所から歴史的な背景が探られています。東大和市の場合は貯水池建設により古村の地域が移転しているため、正確には把握できません。お隣の武蔵村山市の場合は次のような特徴があるとされます。武蔵村山市史から引用します。



「狭山丘陵南麓にはいくつもの小さな谷が並んでいるが、板碑の多くはこの谷の奥および入り口付近を中心に広がっているのである。これは、平安末期から鎌倉期にかけての谷を単位とした開発行為を始めとする諸活動のあり方と、板碑の分布が無縁でないことを示しているのではないか。

とするならば、これらの谷を中心に営まれた中世人の活動は、板碑の造立年代が示す一四世紀さらには一五世紀に引き継がれていると考えられよう。その中で興味深いのは、三ツ木地区峰の谷および中藤地区赤堀の谷における板碑の分布状況である。

この二つの谷の周辺から出土している板碑を見ると、いずれも谷の奥に所在する板碑の方が谷を出た平地部分に所在する板碑よりもいささか古い傾向を持っているのである。

この二つの谷をめぐる板碑のあり方から、

- ・鎌倉時代に造立された板碑は谷の奥に、
- ・室町時代の板碑は谷の外に

という傾向を見いだすことができるだろう。

それは、先に推測したように、鎌倉時代にまず狭山丘陵南麓の小さな谷が開発拠点として切り開かれていったことを反映していると考えられる(この開発時期は平安時代末期まで遡る可能性を秘めている)。

この谷の中を拠点として活動した人びとは、室町時代に入ると谷を出た場所にも活発な活動痕跡を

残すようになるのである。」（一部省略 武蔵村山市史上 p 291 ～ 292）

東大和市の場合、板碑が当所まつた場所ではなく、別の場所に動いて保存されているため、地域的な移り変わりの確認ができないのが残念です。

Ⅱ 東大和市の板碑

1 東大和市最古

永仁二年（1294）の板碑



阿弥陀様（一尊）を表す梵字と永仁二年（1294）の年号が彫られています。人名や供養の内容などは彫られていません。53 × 23

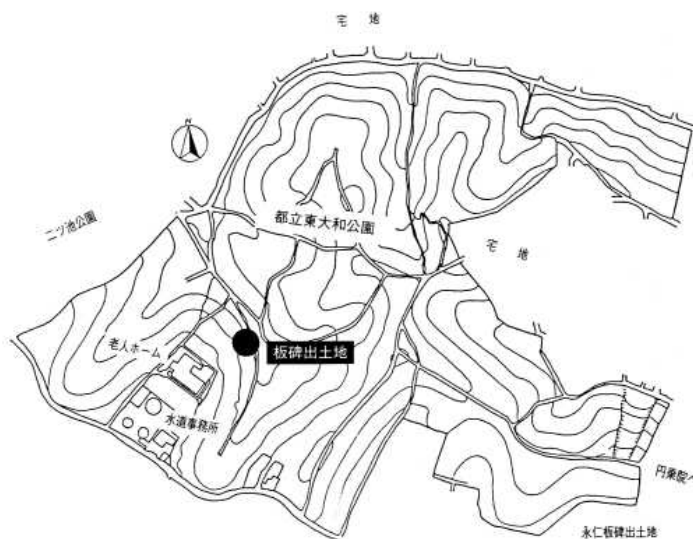
発見された場所は、狭山丘陵南麓、二つ池の南、旧水道事務所があった北向きの斜面です。今は都立東大和公園の緑地になっています。中世には丘陵の南の谷から北の谷へ移る細い道が通り、そこから拝することができたと考えられます。

1290 年代は狭山丘陵の谷々を中心に小さな集落が散在し、南面の武蔵野は一面の原野でした。

御深院二条は『とわずがたり』で、1290 年 8 月、信濃の善光寺から再び武蔵野に入り次のように書いています。

「八月の始めつ方にもなりぬれば、武蔵野の秋の気色ゆかしさにこそ、今まで、これらにも侍つれと思ひて、武蔵国へかへりて、浅草と申す堂あり。十一面観音のおはします。霊仏と申も、ゆかしくて参るに、野の中をはるばると分け行くに、萩（はぎ）・女郎花・萩

（おぎ）・芒（すすき）より外は、またまじる物もなく、これが高さは、馬に乗りたる男の見えぬほどなれば、推し測るべし。三日にや、分け行けども、尽きもせず、ちと傍へ行く道にこそ、宿などもあれ、はるばる一通りは、来（こ）し方行く末、野原なり。」（巻四の六）



東大和市最古の板碑の出土地（東大和市郷土博物館原図）

2 三光院所蔵板碑 応安二年(1369)89 × 36



南
無
阿
彌
陀
佛

正月一日禪門

應安二年
酉己日阿

蓮華台の上に「南無阿彌陀仏」と草書体で阿彌陀仏の名号（称号）が大きく彫られています。このような板碑を名号板碑と呼びます。

大和町史から引用しておきます。

「板碑の表面には、その建立の趣旨によって、また建立した者の宗派や時代によって、種子その他いろいろなものが刻されている。種子は阿彌陀・彌陀三尊・光名真言等が多い。初期のものは上部に種子を重点的に大きく刻し、その下部に余地をあけて経文の句・願文等を明確に記している。阿彌陀三尊・観音・薬師・地藏等諸尊の図像を伴うものもあったが、余計な装飾はなかった。

後になると板碑は次第に形式的なものとなり、種子は縮小されて単なる荘嚴物と化し、それに反比例して天蓋・花瓶・香炉・燭台・前机等の装飾的なものが加わって、にぎやかにはなったが板碑の本質からは外れたものとなってしまった。

板碑の種子に見られる仏教の宗派は、阿彌陀の浄土教関係が大半であるが、他に題目の日蓮宗など新興仏教諸派、或は大日不動をあらわした真言宗、釈迦・文殊・普賢の天台宗などがある。浄土教の中では、時宗のものが目立っている。

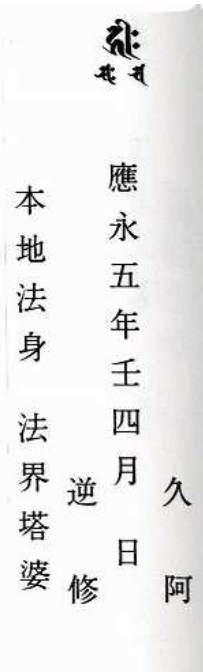
仏教以外の例では神道関係のものも見受けられ、また修験道と結びついた民間信仰的色彩の強い板碑



『狭山之栞』行方不明(1482)



大日堂・杉崎家(1398)70.3 × 27



碑も、室町時代後期から作られた。月待・庚申待・念仏などのいろいろな供養がそれで、また六地藏・十仏・十三仏・二十一仏信仰等に基くものも造られた。

月天子・彌陀来迎図・六地藏などの板碑は、そのためのものである。」

(p159)

◎逆修

生前に、自分の死後の冥福(めいふく)のために仏事をする事。

◎

応無所住而生其心 おうむしょじゅう にしょうごしん『金剛經』禪宗
本地法身法界塔婆ほんじーほっしん ほっかいとうば『舍利礼文』真言宗

3 円乗院 文保三年(1319)86 × 24



《阿彌陀》

光明遍照
十法世界
念仏衆生
攝取不捨

「阿彌陀仏の身からでる慈悲の光は、十方世界を遍(あまね)く照らし、念仏する衆生(しゆじょう)を救い取って見捨てることがない」

『観無量寿經』の偈文で、東大和市周辺の板碑に数多く残されています。板碑の一つの形式をなしていたことも考えられます。

光明遍照
十法世界
文保三年二月日
念佛衆生
攝取不捨

狭山 竹内家板碑 (正和二年・1313)

44 × 21

右志者比丘尼
妙心往生極樂
乃到法界衆生
平等利益也

この板碑は村山貯水池に沈んだ宅部(後ヶ谷村林)にありました。『狭山之葉』は次のように記します。

「此碑文化十酉年十月字西樂寺の畑より掘り出し井の端に置釣瓶の台に用ゐありしが祟りありしために常覺院俊光法印を招請し熊野神として祭る。」

また、武蔵名勝図会にも「熊野権現に崇む」とあります。(p58)

板碑のたたき話は多く伝わります。特に橋にし

たり、台にする場合、病気になる伝承が伝わります。



右志者比丘尼
妙心往生極樂
正和二年 癸丑 九月十六日
乃至法界衆生
平等利益也
孝子 敬白

4 雲性寺(応永八年・1401)103 × 29



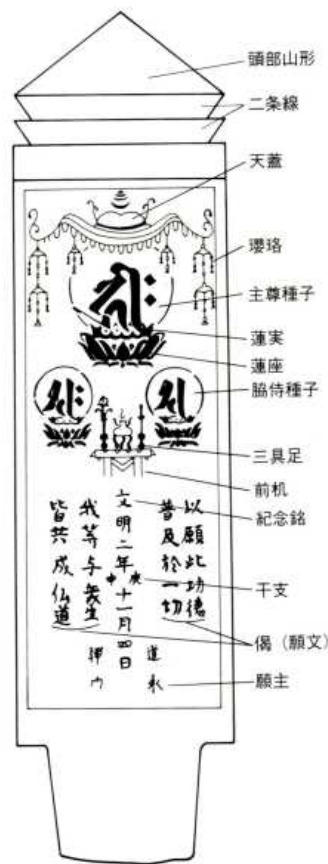
《阿彌陀三尊》

應永八年壬正月廿四日
己

禪門

法重

阿彌陀三尊



一般的には『無量寿経』・『観無量寿経』に基づいて、阿彌陀如来を中尊とし、その左右に左脇侍に観音菩薩、右脇侍に勢至菩薩を配します。

板碑の各部の名称

東大和市史資料編6 p 33

5 慶性院・荒幡家(永正二年・1505)

29.5 × 18.5



《阿彌陀三尊》

永正二年
妙浄禅尼
六月廿二日
丑 乙

蓮花寺に保存されている享徳二年(1453)の板碑が享徳の大乱の始まる前年の造立であるのに関連して、慶性院荒幡家のこの板碑はその乱が終結した年に造立されています。

この間、大石が勢力を拡大し、伊勢宗瑞が伊豆に勢力基盤を確立、関東に触手を伸ばしてきました。

宅部に修験の円達坊が那智本山と関係を持ち、青梅、八王子などとの交流が行われ、村人達の間にも広域の情報が行き来し始める時代に入りました。

6 蓮花寺（享徳二年・1453）40 × 17.5



《阿彌陀》

享徳二年七月

禅門

道春

『狭山之栞』林堂の記述中に「地中古碑あり、左図のごとし」と記されています。

蓮花寺に移される以前は林堂にあったことがわかります。すでに、地中に埋められていた様子が伝えられます。いずれからか移動されてきたことも考えられますが、狭山丘陵南麓に埋められた貴重な存在です。

1449 年、足利成氏（当時は永寿王丸）が鎌倉公方に任命され、1454 年には、成氏が関東管領上杉憲忠を襲って、享徳の大乱が起こるなど、政治情勢が大きく変化しようとしている時代でした。

東大和市最新・円乗院（天文十一年・1542）51 × 18.5



永

道西
禅門

七月廿三日

天文十一年

刀壬

東大和市内に残る最も年代が新しい板碑です。武蔵は時代の空気をガラッと変えています。

- ・ 2 月 15 日、北野天神社の神主職を滝山・滝の城城主大石道俊（定久）が安堵した。
- ・ 6 月、武田信玄諏訪へ侵攻して、諏訪頼重を自殺させる。
- ・ 12 月 26 日、徳川家康生まれる。

など、大石氏の支配が狭山丘陵周辺に及び、戦国大名の動きが活発化します。そして、次代の歴史を変える家康が生まれています。

Ⅲ特色ある板碑

元弘三年板碑 1333 年

東村山市徳蔵寺に保存されています。
狭山丘陵東端の八国山の南斜面にあった
永春庵に建てられていたものを移しました。

銘文から、

- ・ 飽間斎藤盛貞と同孫七家行（新田義貞方の武士）が五月十五日に、武州府中において討死。
 - ・ 十八日に、飽間孫三郎宗長が相州村岡で討死した。
 - ・ 三名を供養するために久米の長久寺（時宗）の開山といわれる玖阿弥陀仏が勧進し、遍阿弥陀仏が銘文を執筆し造立した。
- ことがわかります。

鎌倉幕府討幕のために兵を挙げた新田義貞軍に従って討死した将士の供養塔です。銘文は、『太平記』の五月十五日から十八日の戦いの記事を裏付け、国指定重要文化財に指定されています。



東村山市史資料編6
古代・中世p924

（光明真言五行二十三字）

飽間齊藤三郎藤原盛貞生年六廿
於武州府中五月十五日令討死
勸進玖阿弥陀仏
元弘三年 癸酉 五月十五日 敬
同孫七家行廿三同死飽間孫三郎
宗長卅五於相州村岡十八日討死
執筆遍阿弥陀仏

光明院結衆板碑



応永十三年
(1406)
全長 171 センチ



東村山市光明院に保存されています。
110 余名の人名が読めますが、全体では
130 名を超えるとされます。

狭山丘陵周辺に浄土信仰が広まるにつれ、村人達の連帯意識が強まり、「結縁衆」を組織して、後世の菩提を念じ、法華経を読誦した供養塔とされます。

廻田村の戸数は板碑の造立された応永時代は不明ですが、江戸時代の宝暦 12 年(1762)で 70 軒とされます。

それが、法華経帰依の一結衆として 130 名を超えることは、この信仰集団が東大和市域も含めて、狭山丘陵周辺の数ヶ村にわたる組織であったと考えられま

IV板碑から見える東大和の中世

1 東大和市で把握している板碑からの年代

- ・最古 永仁 2 年(1294)
 - ・最新 天文 11 年(1542)
 - ・年代の明確な板碑 73 枚
 - ・年代の不明確な板碑 33 枚
- | | |
|-----|-------|
| 合計 | 106 枚 |
| その他 | 数枚 |

鎌倉時代末から室町時代に到る 250 年間にわたって造立されてきました。造立年代の明確な 73 枚の板碑を機械的に 50 年で区切ってみると

1200 年代	2 枚
1301 ～ 1350	10 枚
1351 ～ 1400	29 枚
1401 ～ 1450	15 枚
1451 ～ 1500	12 枚
1501 ～ 1542	5 枚

1351 年から 1450 年の 100 年間に 44 枚と集中しています。

2 板碑の集中埋納状況からの年代

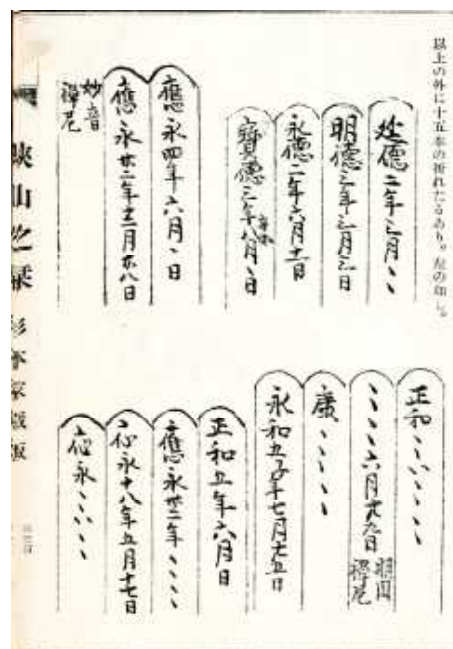
板碑は様々にまつられますが、特殊な例として、集中して埋納されることがあります。

東大和市内では、狭山にその例がありました。杉本林志氏が著した『狭山之葉』に次のように紹介されています。

「古碑図 以上の外に十五本の折れたるあり。左の如し。右は天保年間に農民眞野三右衛門宅地続きの前山を開拓せる時掘り出したる処に立置きたるものにて外に刀一本、鋸一挺出でたるも盗まれてなし。」(p34) とします。

これを年代順に整理すると

正和	1312~1317(北朝年号)
正和 5 年	1316(北朝年号)
永和	1375 ～ 1379(北朝年号)
永徳 2 年	1382(北朝年号)
明徳 3 年	1392(北朝年号)
応永	1394 ～ 1427
応永 4 年	1397
応永 18 年	1411
応永 22 年	1415(2 枚)



不明 3 枚

東大和市域では、この年代に板碑を造立する何らかの要因があったようです。

集中埋納された理由は明らかではありません。埋納された場所は東大和市、武蔵村山市では狭山丘

陵の峰の先端で、立川市では現在の普済寺の地にありました。東大和市では埋納状況は『狭山之栞』記載によるしかありませんが武蔵村山市の状況は下図の通り自分で確認できました。



武蔵村山市阿弥陀が峯の例

武蔵村山市史から引用します。

「中藤三丁目(字入り)の北側の丘陵の一部に阿弥陀が峯と呼ばれる場所がある。この山麓の雑木林のなかに、永仁年間の板碑がしめ縄を張った状態で祀られている。かつてはそのまわりに康安、貞治、嘉吉等の年号をもつ合計一八基の板碑及びその断片が、落ち葉に埋もれて存在していた。武蔵村山市内における中世の板碑群としては、これが最大規模のものである(『武蔵村山市の板碑』参照)。」
(武蔵村山市史通史編上 p 342) 康安 1361～62 貞治 1362～1368 嘉吉 1441～1444

4 板碑の造立者

板碑は誰が造立したのでしょうか？

大和町史を編纂した昭和 38 年(1963)に板碑を調査した早稲田大学の川村喜一 杉山莊平氏は次のように分析しました。

「種子についてみると、これが刻されている板碑はすべて阿彌陀あるいは阿彌陀三尊の種子を刻している。また梵字の光明真言や「南無阿彌陀佛」と念佛を刻したものもある。このようなことから、これらの板碑がいずれも阿彌陀信仰に関係をもつものであることは明らかである。而して、これが大和町に存在する板碑のひとつの特色となっているといえる。

板碑の分布状態は中世集落と密接な関係をもっている。ふつう板碑を建てる場合、建碑者は自己の生活している集落あるいはその近辺にこれを建てたらしい。そうだとすれば、板碑の分布状態から中世集落のそれを導きだすこともできるわけで、この意味で、板碑は歴史地理研究にも有力な資料となりうるのである。板碑を建てたひとびとは、おそらく一般庶民一主として農民一ではなく、支配階級のひとびとであったであろう。」

そして造立者について

「さて、大和町一帯の地域もこの村山氏一族の支配下にあったことは確実である。当時、大和町の北方、現在の所沢市山口の地には村山氏の一族である山口氏がおったが、これと近接する地理的關係からいまの村山貯水池をはさみ、大和町もこの山口氏の支配下にあったと推察できよう。

この近くの所沢市岩崎にある祥雲山瑞岩寺はもと山口氏の菩提寺であったといわれ、いま、この寺には二つの山口氏の位牌と称するものがつたえられている。その一つには、

本願信阿大禅門 貞治六丁未年九月十八日(1367)

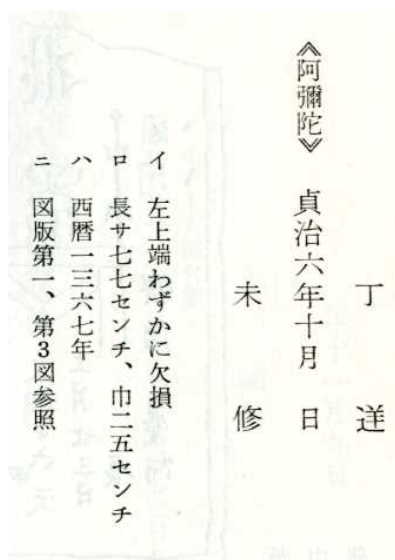
とあり、他には、

故参州大守満叟実公大禅門 永徳三癸亥年六月十三日(1383)

とそれぞれ書かれている。これらは、はたして史実をつたえるものかどうか、はなはだ疑問の多いものである。だが、前者にみえる貞治六年(一三六七)はこの地方において何か大きな歴史的な動きのあった年のように考えられる。

それは清水・大久保平治氏蔵になる二枚の板碑にもこの紀年があることが注意されるからである。すなわち、現在は奈良橋・内野五平氏の手に帰しているが最近まで大久保氏のもとにあった「貞治六年丁未六月二日、逆修、明法禅門」とある板碑(19)と、「貞治六年丁未十月日、逆修」とある板碑(10)である。貞治六年ごろといえば南北朝の動乱が各地でかさねられていたときにあたる。この動乱に山口氏が参加したろうことは容易に想像できる。

このような史実があったと考えて、大久保氏蔵の二枚の板碑をみると、貞治六年の戦いに山口高清とともに参加した村山一族おそらく山口氏の某が出陣を前に万一の事態を考慮し死後の極楽往生を念じつつ逆修供養をおこない上記の板碑を建てたということもあながち想像にだけおわらすことのできない真実性を帯びてくるように思われる。



このように考えてわれわれは大和町所在の板碑はそのほとんどが山口氏に關係するものと推察したのである。しかしながら、山口氏、さらに村山氏一族の動勢をつたえる信賴のおける史料はなく、きわめて断片的な史料によってそれを類推しているにすぎず、その実体が不明であることから、これ以上深く考察を加えることが困難である。(町史研究 7 p1 ~ 40)

造立者は依然として謎

大和町史編纂の頃は山口氏説が関心を集め、町史も次のように記しています。

「大和町の地域も、勿論村山党の勢力範囲の中にあつた。当時は大和町のすぐ北、現在の所沢市山口の地に村山氏の一族である山口氏が居館をかまえていたので、地理的に極めて接近した關係から、大和町の地も山口氏の支配下にあつたと考えてよいであろう。川村・杉山両氏の報告書には、大和町の板碑をほとんど山口氏關係のものと推察しているが、この考えはまつ妥当といえると思う。」 p164

しかし、その後、多くの板碑が発見され、その年代が明らかになるにつれ、別の視点からの分析が求められています。

5 板碑造立時に存在した寺院

東大和市域内での板碑造立に当たって関与したと考えられる寺院は三光院、円乗院、雲性寺です。参考までに、蓮花寺、慶性院についても付記しておきます。

三光院

創建伝承 『新編武蔵風土記稿』「開山は圓長と云、天永三(1112)壬辰五月三日寂す」

寺伝 開山となった快光法印は延文二年(1357)六月一日に入寂。

開基の石井美作が延文四年(1359)に没。

円乗院

創建伝承 開山賢普法印が平治元年(1159)2月8日寂。その墓誌が円乗院代々住職の墓所にあり。

雲性寺

後世の地誌類、寺伝などによれば、永享11年(1439)に堂宇を建設

天正元年(1573)に法印承永が再興

元禄年間(1688 ~ 1703)に地頭石川太郎右衛門が新伽藍を整備。

蓮花寺

寛永八年(1631)4月12日入寂した承雲を中興開祖とする。

当寺の草創・開山、開基は不詳である。

慶性院

開基 義尊上人が遷化された天文16年(1547)を開基の起点

開山 義秀上人が遷化された慶長6年(1601)を開山の起点とする。